

# 「やる気応援奨学金」レポート

## 英サマースクールでの三週間 専門知識獲得と英語力向上を

法学部政治学科二年 菅野 誠一郎 (私立中央大学高校)



「大学一年の夏休みに何をしようか」

桜が咲ききらないうちから考えていた。大学での学びや進路についてのイメージが漠然としていた。今だからこそ出来ること、いま最も興味があること。それらを紡ぎ合わせていき、海外の大学のサマースクールで学ぶことを決断した。

備プログラムを開講しているIFCELSで国際関係論を学ぶことに決めた。IFCELSのサマースクールは三週間ごとの三つのブロックに分かれており、そのうち最後のブロックに参加した。「やる気応援奨学金海外語学研修部門英語分野」をいただき、八月中旬から三週間の濃密な日々を過ごす中で、今後の「学び」についてなどさまざまなことを深く考えさせられた。

### 二つの目標

渡航前にサマースクールでの目標を大きく二つ定めた。一つは専門知識の獲得と英語力の向上であ

る。高校卒業までは検定試験などを通して英語学習をしてきたが、その中心はリーディングとリスニングだった。ライティングとスピーキングも高めること、更にこれまで身につけてきた力を実践的に高めることを目標とした。

もう一つは将来の学びについて考えることである。授業は日頃大学で教壇に立たれている教員により行われ、そのほか学校生活はすべてSOASキャンパス内で送ることになる。そのため、イギリスの大学での学びをじかに感じられると考えた。視野を広げ、今後の学修に生かしていくことを目指した。

### 一番の驚き(?)

サマースクール初日。国際関係論以外のコースを含めたサマースクールに参加する全学生が講室に集まった。ガイダンスの後、コースごとに学生一人一人の名前が呼ばれた。

国際関係論のコースは一九人の大所帯。日本人が半分以上を占めていたことに驚かされた。もっとも、日本の大学の試験が終わる時期の関係で仕方ない部分でもある。六月末から八月上旬に開かれたコースではむしろ日本人は少なかったと聞いた。

国籍よりも多様なのはそれぞれの背景・進路だった。私のような学部一年生はごく少数で、学部二・四年生が主であった。専攻はやはり法学系が多かったが、経済やアラブ文化、物理などを専攻していて、興味があるから、若しくは



自分の幅を広げるために学ぶとい

う人も少なくなかった。進路とし

ては、SOASや自国の大学院に

進む人、翌年のイギリス大学院留

学を目指す人など、話す中で多く

の刺激を受けた。

### 密度の濃い授業

クラスメートとの顔合わせも済  
み、いよいよ授業が始まった。私

が学んだブロック三では国際関係

論の中でも特に人権に着目し、人

道的介入や貧困、ODA、デモク

ラシー、国際法、ジェンダーなど

について学んだ。授業を担当する

のは専門教員と語学サポート教員

の二人。専門教員は普段SOAS

で政治学や国際関係論を教えてい

る方である。

授業は週に二コマあるレクチャ

ーを中心に構成された。宿題とし

てテキストが一つのレクチャー当

たり三〇頁ほど配布された。限ら

れた時間の中で説明を読み込み、

頭に入れるという作業の繰り返し

は、リーディング能力の向上につ

ながった。

レクチャーの前後に、レクチャ

ーの理解を深めるための語学サポ

ート教員によるグループワーク形

式の授業があった。授業で登場し

た概念や難しい単語について、意

見や知識を交換し合った。自国若

しくはその周辺地域の事例を紹介

し合うことも多かった。特に中近

東やアフリカについては詳しく知

らなかったことも多く、更に情報

を得たいという気持ちが強くなっ

た。

これらを通して語彙力が大きく

伸びた。政治や経済についての単

語は日本語では知っていても英語

では表現出来ないことが多かった

ので、英語（だけ）で学んでいく

ことで必然的に吸収出来た。また、

人名など固有名詞の日本語と英語

での発音の差にも日々驚かされた。

授業などネイティブスピーカーの

英語に対して困ることはなかった

が、研修が進むにつれてより余裕

を持って聞くことが出来るようにな

ってきた。成果を実感したのは

むしろほかの学生のノンネイティ

ブの英語に対してである。発音の

癖（日本語ほどの影響はないのか

も知れないが）や単語のチョイス

から聞き取る際に苦労をすること

が初めの頃は多かった。

レクチャー後には専門教員によ

るレクチャー・ディスカッション

があり、主に授業での疑問などを

教員に質問する時間が取られた。

また、授業に収まりきらなかった

補足の説明がなされた。

更に、レクチャーごとにディベ

ートを行った。事前に講義で扱っ

た内容に関連するトピックと賛否両サイドの論点の例は配られており、当日二チームに分かれた。内容の充実と分かりやすさの両立の重要性を最も意識させられる場面だった。どれだけ内容が良くても伝わらなければ意味がなく、どれだけ分かりやすくても内容がなければ相手に伝わるものはない。特に全員が英語を第二言語とする中で、難しい内容をいかに伝わるように説明出来るかに注意を払った。

レクチャーとこれらの一連の授業に加え、毎週末のケーススタディーでは、その週の講義で学んだ内容に関連した事例を扱った。事前にテキストが配布され、映像の視聴やディスカッションを通して、理解を深めた。



教会が校内で配るfree meal。異文化も多く体験

校内で行われる授業だけではなく、フィールド・トリップとしてVictoria & Albert Museumを見学した。Disobedient Objects (反抗的なオブジェ)の特別展が開かれていた。社会運動の中で大きな役割を果たしたモノ、例えば横断幕が取り上げられ、授業で扱ったガラスーツ運動の例を見た。また、私たちが訪れた金曜日の夜にはFriday Nightとしてさまざまな催しが開かれていた。フェミニズム団体であるGuerrilla

Girlsやアムネステイ・インターナショナルによる講演などを見て回った。

### グループプレゼンテーション

三週間の集大成として授業最終日には国際関係論に関連したプレゼンテーションを行った。私は日本人の男子学生とモロッコとスペインからの女子学生の四人で、南北問題についてその構造を事例研究を中心に取り上げた。

プレゼンの内容を練り上げていく作業は新たな発見の連続だった。「南北問題」という言葉から幾つもの切り口が出てきた。解決策の提示をするか意見が分かれるなど、それぞれが自国で学んできた内容の多様性を感じられた。全員の考えを一つの形にすることは大変でもあったが、とても楽しく、時には寮の談話室で夜遅くまで話し込むこともあった。

また、準備段階では文献を読み込むことが必要となった。サマースクールの学生も通常のフルタイムの学生と同じようにSOASの施設を利用出来たため、図書館類

繁に利用した。アジアやアフリカ、中東に関する蔵書の世界的な中心であると言われ、国際関係論を含めた政治学の蔵書も充実していた。

### 青空の下で

「最終日の修了式後」。三週間の中で最も楽しかった時を聞かれると、こう答える。飲み物やスナックが用意された修了式会場で歓談した後、先生も誘ってクラスの半数以上が更にスーパーなどで買い出しをして、近くの公園へ。広い青空の下、車座になり、そこで数時間ひたすら語り合った。各国の大学事情や自分が学んでいること、更に政治や社会の話など。夕方になり寒くなってくると、再び学校に戻って地下にあるバーへ。話題が尽きることもなく、そしてピリヤードなどもあったので盛り上がり……外はすっかり暗くなっていた。

### 三週間で得たもの

これほどの知的な刺激に囲まれて過ごした時間は今までになかった！



修了式後、先生を囲んでの「コマ

この一文に尽きる。空きコマには勉強会を開くこともあった。また、さまざまな背景や目標を持ったクラスメートと話すことで、自己を客観視すると同時に、自分の進路などについても考えさせられた。専門分野を学ぶプログラムだったため、留学や大学院進学に強い関心を持っている人が集まっていた。特に、自身の目標に向かって、SOASの教授と話をしに行くという人の背中を見たことは強い印象に残っている。

今回の活動を経て最も変化したものは私自身の目標である。夏まで描いていた将来像とは異なるものになった。大学入学時点で私は将来就きたい職業と大学で学びたいことの二つがあった。それらの間に関連はなく、前者は何年も前からのがれであり、後者は自らの興味関心と高校での課外活動を通して得た問題意識を基にしたものであった。

自分の中に悩みや疑問は前々からあったが、三週間共に学んだクラスメートから自らの興味関心を深めることの面白さ、深めるため

の方法はいくらでもあるということとを教えられた。そして、それを追究していきたく強く思うようになった。今後の学びに対して明確な目標が出来たことは大きかった。

また、今後学んでいく時に、何を自分の強みとしていくかを考えさせられた。ヨーロッパや北アフリカから参加していた学生の宗教問題や中東・アフリカ情勢についての知識量には驚かされた。自らの知識の少なさに危機感を覚え、プログラム中もプログラム終了後も勉強を続けている。一方で、アジアでの出来事や自ら学んできた知識については決して引けを取っていないかった。つまり、自分の強みはそこにあり、それらを伸ばすことも重要である。

ロンドンに滞在した三週間で「学び」に対する渴望が強くなった。知らず知らずのうちに「学び」への勢いが衰えてしまっていたことに気付かされた。三週間の経験は今後の学生生活、更にその先の人生において、大きな原動力となるだろう。